

万国の労働者、被抑圧民族団結せよ！

社共にかわる革命的労働者党を創建しよう！

1986年 1月25日

毎月25日発行

第85号 6頁 200円

定期購読料（1部22回）
手渡し 3000円／開封 3500円／密封 4000円

赤旗

共産主義者同盟中央機関紙

(1980年2月28日第3種郵便物認可)

主な内容	1面～3面——山岡強一氏虐殺弾劾 ・国粹会金町一家解体
発行	赤旗社
連絡先	東京都下谷郵便局
行	私書箱180号



81年12月31日、越冬闘争中、山村組争議決着のため、山三・弥栄建設へのおしきかけ団交

山岡強一氏虐殺弾劾　日本粹会金町一家解体　天皇主義右翼を一掃せよ

声 明

共産主義者同盟中央委員会

共産主義者同盟中央委員会は、日本國粹会金町一家の手による山岡強一氏の虐殺を満腔の怒りをもって弾劾するとともに、共に闘い來て倒れた仲間の死を深く追悼するものである。

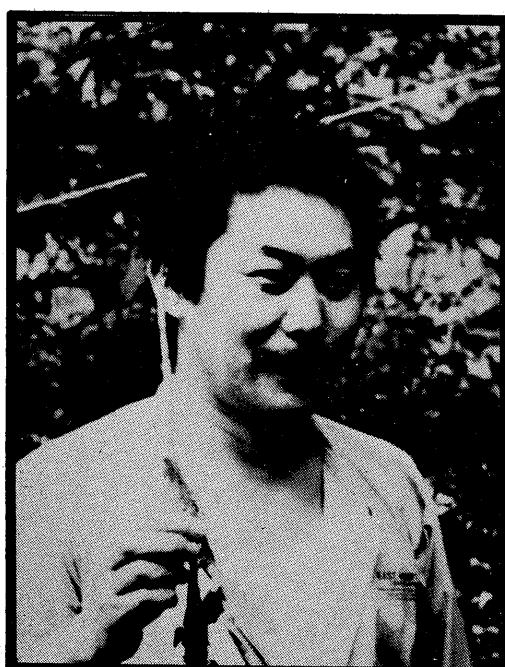
山岡強一氏は、七〇年代初頭の山谷現闘・釜共以来、今日の日雇全協に到るまで、寄せ場日雇労働者の運動における我々の良き先輩であり、大いに議論もたたかわせながら、幾多の修羅場を共にくぐり抜けて来た良き仲間であった。寄せ場の運動は、この十数年のうちに、力強く発展し成長した。日帝の戦争遂行体制構築・労戦産報化に抗して闘う労働組合運動の最前線で指導し抜き、山谷を全国の日雇・下層労働者の階級的出撃点として一步一歩打ち固めてきた。

一年十二月二十二日の佐藤満夫氏刺殺につづく、今回の山岡強一氏射殺・右翼テロのもつ政治的意味は重大である。事態は、はつきりと天皇在位六〇年式典を射程に入れた政治情勢を背景として起つた。日帝・中曾根の戦争遂行体制構築・民族排外主義の煽動に励まされ、天皇主義右翼が勢いづいた。

共産主義者同盟中央委員会は、日帝打倒・米帝一掃・プロ独樹立・社会主義革命を目指し、日帝の戦争準備・天皇主義攻撃に対決する全人民的政治闘争の構築を推進する。そして、その一大拠点として山谷現地における、国粹会金町一家を叩き潰す闘いを断固として推進し貫徹する決意である。

我同盟は、日雇全協と共に闘い、勝利する。

一九八六年一月二十五日



山岡強一氏略歴

の焼身決起を受け、現闘委の総括を深めていく。

一九四〇年七月一五日に、北海道雨竜郡沼田町に、炭鉱労働者の息子として生まれ、育つ。

一九六八年一一月、山谷に入り、いまなお「マンモスボリ公せんめつ」の報復として旭川刑務所に無期刑で在監を強いられ、嚴

正独居の弾圧下にある磯江洋一氏らと、東京日雇労働組合の運動を推進した。

一九七一年、船本洲治氏（七五）年六月二十五日、沖縄で焼身決起）から出会い、新たな闘いの模索の登場と、山谷争議団に対する武装襲撃・互助組合結成策動がそれだった。この反動的・寄生虫的企図が日雇全協の二年余の闘いによって粉碎され、重大な打撃を被った結果、より一層全国政治に規定された。右翼テロの形での反撃を強制されたのであった。だがこれは同時に、反革命の新たな攻勢の宣言と見なければならない。

共産主義者同盟中央委員会は、日帝打倒・米帝一掃・プロ独樹立・社会主義革命を目指し、日帝の戦争準備・天皇主義攻撃に対決す

る全人民的政治闘争の構築を推進する。そして、その一大拠点として山谷現地における、国粹会金町一家を叩き潰す闘いを断固として

佐藤満夫監督虐殺以降は、彼の遺志を受け継いで、山谷のドキユメンタリー映画の製作に邁進した。

一九七五年六月二十五日、船本氏

しつかりと依拠し 大衆的実力闘争布陣で 天皇制攻撃を打ち砕け

寄せ場を階級的労働運動の出撃拠点と 打ち固め、全ての天皇主義右翼を一掃せよ

すべての同志、友人諸君！

共産主義者同盟は、深い悲しみと満腔の怒りをもって、日雇全協の創設者であり、指導的中枢であった山岡強一氏戦死の訃報を届けなければならぬ。

山岡氏は、日本国粹会金町一家

総代・金竜組の全体重量をかけた、

卑劣なテロによる殺害さ

れた。日雇全協は「戦後政治の総決算」戦争遂行国家体制づくりにむけた天皇制国民統合を要とする

日帝中曾根の国家支配再編攻撃

に國際主義を掲げて真向から立ちはだかた。寄せ場を日雇一下層労働者を筆頭とする階級的労働運動の

出撃拠点と打堅めた日雇全協に対し、ヒロヒト在位六〇周年を横杆とする国家権力の全面的な反動攻

勢は、この路線と組織の存在を抹殺するため、組織解体弾圧、窮屈に対する差別煽動と虐殺、そして環境浄化に名を借りた反動的アシスト攻撃にうつて出ていた。

もはや、いっさいの逡巡は許さ

れない。日雇全協の山岡強一氏虐殺への報復戦撤・日本国粹会金町一家解体の号砲によって、わが

國における革命と反革命の本格的階級攻防は、山谷をはじめとする右翼潮流の、天皇の旗の下での密集した反革命組織せずにはおかな

い。そしてこれは、全戦線での天

皇制と安保をめぐるたかいの真

価を問い合わせ、階級闘争と低迷する單

一のプロレタリア革命党建設の活性化と発展を促す潮流と部隊の形成に

ひつ、敵国家権力・天皇主義右翼

の攻撃と真向うから対決する(1)大

き算」路線に見合う、山谷への暴

りって打碎かれなければならない。

すべての同志、友人諸君！

共産主義者同盟は、深い悲しみと満腔の怒りをもって、日雇全協の創設者であり、指導的中枢であつた山岡強一氏戦死の訃報を届けなければならぬ。

山岡氏は、日本国粹会金町一家

総代・金竜組の全体重量をかけた、

卑劣なテロによる殺害さ

れた。日雇全協は「戦後政治の総

決算」戦争遂行国家体制づくりにむけた天皇制国民統合を要とする

日帝中曾根の国家支配再編攻撃

に國際主義を掲げて真向から立ちはだかた。寄せ場を日雇一下層労働者を筆頭とする階級的労働運動の

出撃拠点と打堅めた日雇全協に対し、ヒロヒト在位六〇周年を横杆とする国家権力の全面的な反動攻

勢は、この路線と組織の存在を抹殺するため、組織解体弾圧、窮屈に対する差別煽動と虐殺、そして環境浄化に名を借りた反動的アシスト攻撃にうつて出ていた。

もはや、いっさいの逡巡は許さ

れない。日雇全協の山岡強一氏虐

殺への報復戦撤・日本国粹会金

町一家解体の号砲によって、わが

國における革命と反革命の本格的

階級攻防は、山谷をはじめとする右

翼潮流の、天皇の旗の下での密集

した反革命組織せずにはおかな

い。そしてこれは、全戦線での天

皇制と安保をめぐるたかいの真

価を問い合わせ、階級闘争と低迷する單

一のプロレタリア革命党建設の活性化と発展を促す潮流と部隊の形成に

ひつ、敵国家権力・天皇主義右翼

の攻撃と真向うから対決する(1)大

き算」路線に見合う、山谷への暴

りって打碎かれなければならない。

この道を避けて通ることは絶対に許されない。それは、大衆的実力闘争への深い绝望を生み出し、日帝の侵略と対ソ戦・日韓軍事決算による戦争遂行国家体制づくりにむけた天皇制国民統合を要とする

日雇全協は「戦後政治の総

決算」戦争遂行国家体制づくりにむけた天皇制国民統合を要とする

日雇全協は「戦後政治の総決算」戦争遂行国家体制づくりにむけた天皇制国民統合を要とする

日雇全協は「戦後政治の総決算」戦争遂行国家

腐臭をはなつ逃亡派

I 見栄と虚飾のかたまり

生田逃亡派の新聞がようやく出た。自己的政治上の立場、主張をわれわれの前にはつきり示すべきだ、という同盟員多数の要求をこの四ヶ月間無視し、それをはつきりとさせる絶好の機会! 大会からひたすら逃げていたことからすれば、この発表は全く歓迎すべきことである。

しかし、その内容と形式とは、かれら逃亡派の独善、誤り、無責任、破廉恥を余すところなく示している。今回の党内一分派闘争の最大の特徴は、同盟の指導的な中枢、つまり生田議長その人の代表としてきた体制が、下から、いわば同盟員大衆の圧倒的多数の自發的な糾弾により、根底からひっくり返ったことにある。それはわれわれにとって新鮮な驚きであり、彼女にとって終生忘れえぬショックであった。われわれの培ってきた態度からすれば、こうした時には、たんに外因でなくわれわれ内部に潜んでいる内因をつかみ出し、その政治的な分析、解決に努めることが第一すべきである。そのためには、率直かつ真剣な討議を徹底して組織することである。そして、その中から生み出されてきた。政治に、自己の利害を從わせ、つくりことである。われわれ赫旗はこゝしてでき上ったし、以降、かかる立場から大胆に脱出した。その政治主張の右傾化、民同左派への迎合はもちろん、逃亡一回の機関紙発行の組織過程自身に、彼女らのセクト主義は典型的に現れている。すでに前々号で報告したように、今回の党内闘争は一昨秋より始まり、昨夏爆発した。それはきわめて粘り強く意見を闘わ

（事実認識のデータ）メ

逃亡派は、その「大会」報告の左翼の世界に飛び去るとしている。赫旗綱領に対する不信を表明し、「平和と民主主義」派の後尾に自己の居場所を定め、「綱領観

せ問題をそぐらうとする態度で展開された。かつ、それは十分な論議を大会で集約し、ついで実践的に検証してゆく方法で解決が計ら

れた。しかし、論議が本格化するや彼女はただ手勢だけを囲いこみ、ひたすら逃亡を決めこんだのだ

た。これは、従来の、そして今もことである。

われわれは、逃亡派（分派）のクト主義そのものに外ならない。

われわれは、逃亡派（分派）の新左翼分派のとっている不毛なセ

クト主義そのものに外ならない。

われわれは、逃亡派（分派）の新左翼分派のとっている不毛な

労情・労組連の実践的転換を

1 連合体移行を迎えた労戦統一

全民労協は昨年十一月十五日、第四回総会を開催し「①八七年十一月の第六回総会で連合体に移行する、②官公労との信頼を深め、八九年までに全的統一ができるよう努める」方針を決定した。またナショナルセンターと連合体の関係については、連合体移行時点での既存のナショナルセンターを発展的に解消させることが望ましいとの立場を明らかにした。

総評は、昨年七月の定期大会で「八〇年代に全的統一の合意形成をおえる」として、労戦統一の主導権をとるように積極的に取組む方針を決めたが、それは「団体間協議の場において全般的な障害となる問題は注意深く取り除いていきたい」（眞柄事務局長答弁）という内容であり、連合体移行を事实上承認した上ででの対応なのである。労研センターに結集する総評主流左派は、全的統一の基本方針と展望のない限り連合体化に反対するという立場で総評大会に臨み、日教組は全民労協の連合組織構想検討委員会が昨年の五月に発表した中間報告に反対する修正案を提出した。中間報告とは、①全民労協を民間の全国中央組織と位置づけ、②基本構想を綱領憲章にひきつき、③国際自由労連一括加盟、④都道府県に地域組織を設置するという内容である。しかし、日教組の修正案に賛成の意志表示をした組合は民間中小の数単産であり、たのみにしていた官公労の多数は「全民労協の連合体移行が全的統一の障害とならないよう総評幹事会は努力する」という十一単産の要望書をだした。右派からの攻撃もあり、結局は先の真柄答弁で定期大会は一件落着、日教組は修正案を取り下されたのであった。

総評はその後の団体間協議の中で、連合体移行後も全的統一までは既存ナショナルセンターは存続するという「重加盟」を主張する同盟に相手にもされなかつたのである。結局、堅山全民労協議長の提案で、ひとまず收拾。それは労働五団体としての固定化は絶対に避ける。連合組織は民間部門の全国中央組織としての機能・役割ができる限り網羅するという原則を確認することにとどめ、「重加盟問題については言及をさけている。「連合体の具体的姿をみて各ナショナルセンターが判断してくれればよい」というのである。堅山提

案にもとづいて全民労協第四回総会の方針がつくられた。

総評大会から全民労協総会に至る数ヶ月の動きは、労戦統一の新たな局面を決定づけた。全民労協の八七年連合体移行が決まったことで、総評の組織的解体過程へと突入したのである。総評の解体は、労働団体の合意にもとづく解散決議になるのか、連合体化した全民労連と官公労の統一組織とのブリッジなのか、労連加盟してなしくずし的に解体するのか、どのようなコースをたどるかは予言できないが、近いうちに総評がなくなることは確実である。

このようなかで、革命的左翼と称している部分は有効な反撃を組織しているとはいえない。民間の尻押し部隊としての左翼反対派の地位にどっぷりとつかり、そこから抜け出る勇気も発想ももぢえぬまま、総評の崩壊に往往左往したり、はたまた永遠の体制内左翼に甘んじているものが多い。

労戦の右翼的再編反対を叫んでいるだけではなく、何をめざし、どのような運動をつくりあげるのかという課題に対して応えるために、昨年二月、大阪で開かれた労情集会に労働者宣言が提案された。われわれはその趣旨には大いに賛成であるし、一定の意見はすでに述べてきたが、労働者宣言をめぐる大衆的討論が、労働者宣言をめぐる大衆的討論ではないためか、今ひとつ現実性をおびたものとなっていない。

革命を成しとげようとする共産主義者が、階級闘争の主戦場である労働戦線でどう労働者の多数を得てし、社会主義をめざす階級的労働運動を構築していくのかということに真剣に答えなければならないのである。

2 労戦の右翼的再編をどう把えるのか

討論集会に向けて

3 第十回全国労働者

討論集会に向け

開会式

天皇制をめぐる諸分析

一、問題のむずかしさ

七〇年代このかた、天皇制をめぐる論議が左からにせよ右からにせよ活性化してきた。とりわけ裕仁在位六〇年式典を四月に控え、鳴物入りの宣伝と、粘り強い批判者が飛びかう状況にある。これらは日本の政治および経済の曲り角の中で、天皇制の役割のそれなりの転換、また現実政治をめぐる軋轢の増大に対応したものに他ならぬである。

左翼にあって天皇制は戦前問題の中心に位置していた。革命運動の実践上、理論上正面に天皇制は存在していた。戦後、天皇制への関心は以前に比べ大幅に薄れた。天皇制問題は、天皇制そのものが脇役となるのに対応し、緊迫性を失った。天皇制をいかに位置づけ、また分析するかは、戦前にあつては戦略上の要衝を占めていた。今それはそれなりの注目を浴びているとはいへ、中心問題とはとても言ひ難い。しかしながら、いぜん日本

の国家機構の一環として天皇制は今日も存り、戦争遂行体制としてのいわゆる「八五年体制」への国家・統治態勢の転換の不可欠の一翼をなしている。それは、革命の対象に他ならない。

天皇制を理論的に解明する作業は、今日まで着実に進められてきている。そして、マルクス主義の見地からの分析がすぐれていることは言う迄もない。

しかし、天皇制を位置づける作業は、戦前も以後も一種むずかしさを伴っている。それは、戦前においては研究上でさえ圧迫を被つ

たというに止らない。日本資本主義の発展の特殊性、その総括としての国家の特異さ、これを解明することの難しさに問題の核心はある。研究と論争の積重ねが問題を突りあるものとして解決してきた、とすべき言いえ

ない状況がある。

一九二〇、三〇年代にはじめて学問的にメスガ入られてから今日にいたるまで、なお結構のつかない論争のマトになっている。この間に、その分析の理論は深められ、研究の対象領域も多面的となつたが、まだ十分に整合された結論はえられてはいない。それどころ

二、戦前の天皇制について

(一) 経済決定論=三一テーゼ

われわれは、今日の天皇制についての理論、立場を検討する前に、戦前の天皇制に関する理論上の問題点をふり返っておこう。今日いざん論議をひきずつて明治以降、第二次世界大戦における敗北までの期間の天皇制の位置づけから、われわれは今日の天皇制また国家問題について有意義な教訓をそれなりに見出しえると考へる。

周知のように、戦前の天皇制を絶対主義権力またはその転化形態とみるか、それとも單なるブルジョア王政とみるかは、当面する革

命と社会主義革命路線との間でのブレを見せてきた。また日本共産党に對立して、革命の建設を始めた新左翼派は、共産党に対する論議をひきずつて明治以降、第二次世界大戦における敗北までの期間の天皇制の立場づけから、われわれは今日の天皇制また国家問題について有意義な教訓をそれなりに決する論拠をそれへの批判派―労農派系統の論拠を依つたのであった。

ここでは、戦前の革命運動の大きな成果で、あつた日本共産党の主要文章、綱領草案から三二年テーゼを媒介に、問題を簡単にではあるが切開してみよう。

一九二二年に結成された日本共産党は、確固とした統一的な指針を追求し綱領の検討を直ちに開始した。「天皇の政府の転覆及び君主制の廢止」を掲げ、民主主義の課題を革命の中心任務とした草案は、結局審議未了に終

たとはいへ、論議の口火を切るものとなつた。しかし、日共が綱領に類する指針をそれなりに打ち固めたのは、ようやく二七年になつてからである。

二七テーゼでは、日本国家の特徴は、ひとつ骨格をもっておし出されている。すなわち日本国家は、「全アジア大陸における第一

級の帝国主義権力」となり、「それ自身が日本資本主義の最大の要素」であり、多くの封建的特質を持つ、「封建的要素、貴族的及

び軍閥」が「政府において大なる役割を演じ」

か、今日の研究状況は、混迷に近い様相を呈しているといつてよい。(注①)

かかる発言が、明治天皇制=絶対主義権力とする講座派の伝統を忠実に継承し、その主張をあくことなく繰り返している研究集団か

ら出していることを考へる時、「混迷に近い様相」の底の深さを伺い知ることができよう。

そして、「混迷に近い様相」は、たんに明

治天皇制をどうとらえるかについてのみな

らす、明治以降の天皇制をどうとらえるかに

ついて、やはりそれなりに言えることなので

ではないにせよ浮び上がらせよう。

「旧封建的形態をブルジョア的内容を以て満たす二重の過程」として事態が進んでいる、等として特徴づけられている。(注②)

しかし、天皇制の特徴づけは全く不充分なものであった。そこでは、「天皇制は實に巨

大なる自己所有の土地を支配するのみならず、

多くの株式会社及びその連合体の大株主であ

り最後に一億円の資本金を有する自身の銀行

を有っている」事実が示されているだけであ

る。ここでは、三一テーゼ以降、現実とかけ離れ極めて硬直した規定となつた天皇制国家

権力=絶対主義王制とする見地の芽はえがあ

る。しかし、そこにはいま天皇制に関する

積極的な規定ではなく、かつ天皇制を頂点と

した日本の國家権力の統一した性格づけに全

く成功してはいない。

日本国家について統一した規定が与えられ

たのは、三一テーゼにおいてであった。それ

は、「日本は今や高度に発達せる帝國主義国」

であり、「日本の國家権力は金融資本が羈縛

を握れるブルジョア地主の手中に」あり、天

皇制は「労働者・勤労被搾取農民大衆の抬頭

に対する金融資本を先頭とする支配階級のフ

シズム的弾圧、搾取の有力なる道具となっ

ている。そしてこの時代における基本的な階

級的矛盾はブルジョアジーとプロレタリアー

トとの対立である」とし、社会主義革命を中心任務として押し出した。

この三一テーゼは、翌年直ちに三二テーゼ

に取つてかえられたように、戦前の日共内に根づくことはなく、否定された。今日もそれ

た。

その力関係は日に日に前者に傾いていたのだ

った。

別問題である。

注(1) 後藤靖編 「天皇制と民衆」 東大出版会 p.115

注(2) コミンテルン 「日本にかんするテーゼ集」 青木文庫 戦前の日共の分析の引用は以下も同書による

注(3) 三一テーゼを「七・三一テーゼ」に比較して「相対的な正しさをもつ」としてその社会主義革命路線を「二十世紀における革命はあらゆる革命が本質的にプロレタリア革命であり、共産主義者の任務は、全世界においてプロレタリアートをブルジョアジーに対する革命闘争に決起させることである」(田川和夫 「日本共産党史」 p.22)とした新左翼に一般的論評、根拠づけが全くの誤りであることは多言を要しない。ここでは、既存の国家権力を暴力革命によって打ち倒さねばならないという意味での権力問題はあるが、革命の性格、任務は当の打ち倒すべき国家権力の具体的な有り様によつて、全然異つたものとならざるえないといふ意味での権力問題が欠落している。もちろん、この論評が、二十世紀における実際の革命の歴史を知らない所から出していることは言つ迄もない。

への評価は相対立し一分されている。つまり、日本に代表される否定派と、新左翼等の肯定派とに。

三一年、中央委員会は「新テーゼ発表に際し同志諸君に告ぐ」中で、「帝国主義日本において演ずる天皇制の具体的役割を充分正しく評価しなかった」こと等で三一テーゼを批判している。そしてその根底に、「帝国主義の段階に入れる日本資本主義を経済的見地からのみ見ようとする傾向」のあることを指摘しているのである。この批判自体は、それなりに適格であろう。

近代ブルジョア社会において国家権力は、から直接導いていた。この機械的な程の経済力による支配的地位をも保証する」という見地に適格である。

しかし、天皇制の特徴づけは全く不充分な

ものであった。そこでは、「天皇制は實に巨

大なる自己所有の土地を支配するのみならず、

多くの株式会社及びその連合体の大株主であ

り最後に一億円の資本金を有する自身の銀行

を有している」事実が示されているだけであ

る。ここでは、三一テーゼ以降、現実とかけ離れ極めて硬直した規定となつた天皇制国家

権力=絶対主義王制とする見地の芽はえがあ

る。しかし、そこにはいま天皇制に関する

積極的な規定ではなく、かつ天皇制を頂点と

した日本の國家権力の統一した性格づけに全

く成功してはいない。

日本国家について統一した規定が与えられ

たのは、三一テーゼにおいてであった。それ

は、「日本は今や高度に発達せる帝國主義国」

であり、「日本の國家権力は金融資本が羈縛

を握れるブルジョア地主の手中に」あり、天

皇制は「労働者・勤労被搾取農民大衆の抬頭

に対する金融資本を先頭とする支配階級のフ

シズム的弾圧、搾取の有力なる道具となっ

ている。そしてこの時代における基本的な階

級的矛盾はブルジョアジーとプロレタリアー

トとの対立である」とし、社会主義革命を中心任務として押し出した。

この三一テーゼは、翌年直ちに三二テーゼ

に取つてかえられたように、戦前の日共内に根づくことはなく、否定された。今日もそれ

た。

その力関係は日に日に前者に傾いていたのだ

った。

別問題である。

しかし、当時の日本の国家権力をここから直接、単純に導き規定することはできない。

それは、国家権力というものが本来、社会の

経済上の下部構造から相対的に独自であり、

独特であり、特殊な形態を有していた。その

特殊性を忘れたり、過小に評価してはならなかつた。経済的に支配する階級の代理人たちやその一派が権力を掌握し、行使してゆくと

いうよりは、いわゆる天皇制官僚による権力

の相当独自な操作、苛烈な專制政治、狹隘な

排外主義、國家による宗教の創造とその強制、

軍国主義、西欧の近代的な制度のそれなりの

導入と古色蒼然たる慣習との癒着、たしかに

天皇を頂点としてはいるがそれなりに系列を

違えた部分からなる國家機構等々、天皇制專

制国家を色彩する特殊性を、三一テーゼは対象化しなかつた。当面する革命の任務を社会

主義革命としたその完全に間違った方針提起

は、この天皇制国家権力の対象化の誤りに原

因のあることは疑いない。

とはいえ、三一テーゼの弱点をつき提起さ

れた三一テーゼが妥当だったかどうかは全く

あることは疑いない。

たとえば、三一テーゼが妥当だったかどうかは全く

あることは疑いない。

注(3) 三一テーゼを「七・三一テーゼ」に比較して「相対的な正しさをもつ」としてその社会主義革命路線を「二十世紀における革命はあらゆる革命が本質的にプロレタリア革命であり、共産主義者の任務は、全世界においてプロレタリアートをブルジョアジーに対する革命闘争に決起させることである」(田川和夫 「日本共産党史」 p.22)とした新左翼に一般的論評、根拠づけが全くの誤りであることは多言を要しない。ここでは、既存の国家権力を暴力革命によって打ち倒さねばならないという意味での権力問題はあるが、革命の性格、任務は当の打ち倒すべき国家権力の具体的な有り様によつて、全然異つたものとならざるえないといふ意味での権力問題はあるが、革命の性格、任務は当の打ち倒すべき国家

権力の具体的な有り様によつて、全然異

つたものとならざるえないといふ意味での権力問題はあるが、革命の性格、任務は当の打ち倒すべき国家

権力の具体的な有り様によつて、全然異

つたものとならざるえないといふ意味での権力問題はあるが、革命の性格、任務は当の打ち倒すべき国家

権力の具体的な有り様によつて、全然異

つたものとならざるえないといふ意味での権力問題はあるが、革命の性格、任務は当の打ち倒すべき国家

権力の具体的な有り様によつて、全然異

つたものとならざ